

山路の露注釈（十一）

西 木 忠 一
池 田 良 子

凡 例

一、本稿は『統群書類従』巻第五百十（物語十）『山路の露』を注釈したものである。

二、『統群書類従』本は全編区切らず書き続けているが、内容上から適宜段に分け、各段ごとに見出しを付した。

一、本注釈は、本文・通釈・語釈・補記の四項より成る。

一、本文は読解の便宜を考え、適宜次のような工夫を加えた。

(1) 仮名づかいは歴史的仮名づかに統一した。

(2) 時には仮名書きの語を漢字に、漢字書きを仮名に改めた。

かほる↓薫 せうと↓兄人

猶↓なほ 其比↓そのころ

(3) 句読点を付し、送り仮名を補った。

(4) 反復記号はもとの文字にもどした。

中々↓なかなか

(5) 会話や消息の部分は「」で示した。

一、甚しい本文異同のある場合は補記の項で触れた。なお、その項における「第一類本」（主として「刊本系」）「第二類本」（主として「写本系」）の呼称は、本位田重美氏（『源氏物語外篇 山路の露第一類本第二類本』）の呼称を踏襲したものである。

一、語釈・補記の項で明示した諸作品の本文は、『新潮日本古典集成』によった。ただし、上記以外の場合はその都度出典を明記した。

三十一 後 夜

「都とても、なにかさのみ人目しげう侍らん。ことさら山里びてつくらせ侍るべき」など、御心につくさまにきこえなすもあはれなり。さまざまなる絹綾など持たせたりける、とり出でて、姫君の御料はさらにもいはず、尼君にもところせきまで奉りたれば、またなき身によるこびさわぎて、ものさびしき尼君など、目さめたる心地なんしける。右近もや

がてたちとまらまほしく思ひたれども、「かばかり心細きすまひにたえこもりては、いかにして過ぐさん、いとあるまじきこと」とのたまひて、あらぬ世と思ひなしつる山の奥になに尋ね来て袖ぬらすらんとのたまへば、

たちかへるなごりだにかく悲しきながき別れと思はましかばときこえて、いみじう思へり。道すがら見るそのあたりの山さへ、かすかに遠うなるままに、いとど心細くて、かしこにはまたなごり悲しくて、ながめ給ふまぎらはしに、君は例の後夜のおこなひに心入れ給ふべし。

〔通釈〕

（浮舟の母は）「都といつても、どうしてそんなに人目しげくございましょう。特別に山里めかしくつくらせましょう」などと、（浮舟の）お氣に入るように申し上げなさるのも、胸に感じ入るものである。下部に持たせてあったいろいろの絹や綾などをとり出して、姫君（浮舟）のためのもはいうまでもなく、尼君にもあれこれ沢山のものをさし上げたので、他には何も持っていない身ゆえにひどく喜んでしまい、（他の）物持たぬ尼君たちは、目がさめたような心地がしたことであった。右近もこのまま（ここに）立ち止まりたく思ったものの、（浮舟が）「これほどに心細くさびしい住まいに（世を離れて）すっかりこもってしまったては、どのようにして毎日を過ごすことであらう。（そんなことは）あつてはならぬことである」とおっしゃって、

あらぬ世と思ひなしつる山の奥になに尋ね来て袖ぬらすらん

とおっしゃったので、（右近は）

たちかへるなごりだにかく悲しきながき別れと思はましかばと申し上げて、ひどく悲しく思った。帰る道々見えるあの（小野の）あたりの山までも、少しづつ遠くなるにつれて、いっそう心細くて（堪えがたく）、（一方）小野ではまたなごり惜しく悲しくて、もの思いに沈んでおられるのをまぎらわすため、浮舟はいつものごとく後夜の勤行に心を入れなさるようである。

〔語釈〕

○御心につくさま——浮舟の御氣に召すように。

○絹綾——身にまとい、おおう、または着るものを総称して「絹」。

「綾」は綾織物をいい、縦糸に横糸を斜めにかけて斜線の模様を織り出した。

○ところせき——「せき（狭し）」は狭いの意で、あたりが狭くなることをいう。ここでは、そのあたりが狭く感じるほど多くの意。

○またなき身——他には何も持っていない身。

○「あらぬ世と」の歌——浮舟の歌。「浮世ではない世界であるとすっかり思い込んでしまったこの山奥に、（わざわざあなたは）どうして尋ねてやって来て、涙で袖を濡らしているのでしょうか」の意。「あらぬ世」は浮世ならぬ別の世。

○「たちかへる」の歌。——右近の返歌。「（あなたにお会いして）帰る名残惜しさでさえもこのように悲しいのに、これがこの世の長い別れと思うと（どんなに悲しいことでしょう）」の意。反実仮想「ましか

ば(悲しからまし)の()内省略の形。「たちかへる」ことによる悲しみと、「ながき別れ」とを比べてみると、後者の方がより辛く悲しいと詠じたもの。

○そのあたり——浮舟が暮らしている小野のあたり。

○後夜——夜を初夜・半夜・後夜の三分した最後の時間で、寅の刻(午前四時)を中心に、その前後の四時間をいい、この間に行う勤行を「後夜のおこなひ」という。『紫式部日記』(寛弘五年七月中旬)の「まだ夜深きほどの月さしくもり、木の下をぐらきに……後夜の鉦うちおどろかして……」は、後夜の勤行の折に鳴らす鐘の音である。

〔補記〕

①本段は、第二類本にはなく、替わりに次の一節がある。

都にもたれかはしりきこえんなどいひて、尼きみのかたへ、つきせぬことゝもを返くうれしくも有かたくもさまゝ思ひみたれ侍、いかさまにもかさねてやま路わけ侍らむおりそ心しつかになといひ入たる。あまきみ、さらぬ尼たち、哀におしく悲しと思ひたまふらんこゝろのうちをしはかられて、みなすみ染の袂露をきわたす。かゝるめづらかなる事はまたも有やせむ、さまゝおもひかけぬ人々分させたまふにそ、山路のめひほく有心地しておないう今一入なとかと思ふなむわりなきとそ、きこへいてゝいさり出たまふ。かたみにしほたれたまへる袖のけしきいとるみしう、はるゝとわけ給し道のほとも、さなからうつゝとおほえず。うれしともあさましとも、今そかの物ゝけのいゝけむ事、あま君のかたりたまひし初瀬の御し

るへも有かたくおほえて、なきみわらいみ右近とかたりて帰りたまひぬ。姫きみはなこりもこひしく打なかれて、さまゝ成ける身のありさまおほしつゝけて、なをさめやらぬ夢のこゝちし給にも、よろつをそきすてゝおこなひをこゝろに入給ていとゝ給。

〔通釈〕

(浮舟の母は)「都にも誰が知り申しましょうか(誰も知り申さないでしょう)」などと言って、尼君の方に「尽きないこともを、かえすがえすうれしくもありがたくも、(また)あさましいとも、思い乱れております。いかようにも度重ねて山路を分けて(参ります)折は、心静かに……」などと申し入れている。尼君や、その他の尼達は(母が)あわれに惜しく悲しいと(も)お思いなさっている心の中が推測されて、みなは黒染の袂を涙ですっかり濡らしたことである。(尼君は)「このような珍しいことは、きっと二度とはないでしょう。さまざま思いもかけない人々が(山路を分けて)お出かけなさるのは、山路の面目のある気がして、同じう今ひとしおなどと思うのは、当然のことです」と申し上げていざり出なさる。お互いに涙に濡れなさる袖の様子は、大そう目を引くものであり、はるばると(遠方まで山路を)分けなさった道の程も、あたかも現実のこととも思えない。うれしいことだとも、(いやまた)興ざめなことであるとも、今あのもののけの言ったらしいことを、尼君がお語りになった長谷観音の御するべもありがたく思われて、泣いてみたり、また笑ってみたりして、右近といろと話しあってお帰

りになった。姫君（浮舟）は名残も惜しく恋しくてじっと（帰り行くあとを）眺めて、いろいろなことのあったわが身の有様を思い続けなされて、（それでも）やはり覚えてしまわない夢のような心地がなさるにつけても、すべてをすっかり捨ててしまつて、（仏道への）つとめを（とりわけ）心に入れなさつて、この上もなくお励みなさるようである。

以上、試みに「現代語訳」を付しておく。

本注釈九（三十「客人」）において、浮舟の母が「昔かの時時かくろへ給へりしあやしの宿はおぼえ給ふや」と浮舟に帰京をすすめたが、浮舟は「いぶせきはげになかなかなるべけれども、かかるさましたる人は、わざとだにたづぬべき山の奥をわけ出でて、人目しげきすまひはうたてあらん」と答えていた。母のすすめに従わない意向を示していたのである。この浮舟のことばを受けて「三十一 後夜」（本段）では「都とても、なにかさのみ人目しげう侍らん。……」と浮舟の母が語りかけるところからみると、定本（続群書類従）の方が見事に物語の内容を継承しているといえよう。

②浮舟の母は娘を都へと誘うけれども、娘はその誘いに乗って来なかった。母に同行して来た右近は、せめてここ小野にて姫君とともに……と思つたものの、浮舟に帰京をすすめられ、一行は都への道を辿るのであった。小野では「なごり悲しくて」、視線が去りし一行のあとを追つてしまふのを思い切るべく、いつものように「後夜のおこなひ」

に心を入れる浮舟である。

母や右近が帰京すると、やはりさびしさが浮舟の胸にかすかにわき上がる。それを断ち切るごとく浮舟は勤行に励む。出家を果たした今は当然のこととはいえ、あわれの思いが読者の胸に届いて来よう。

三十二 御 達

右近はその暮れに殿へ参りたれば、例よりも人ずくなにしめやかにて、はしつかたは御簾巻き上げて、笛吹きすさびつつおはしますほどなりけり。御達ごたちと忍びてものいふけはひを聞きつけ給ひて、とりわき召し出でて、「いかに」など問ひ給へば、ありつるさまあさからずきこえなして、かの「なに尋ね来て」とのたまひつる、口ずさみも語りきこゆれば、げにさぞ思ふらんとあはれにて、うち涙ぐまれ給ふ。なかなかかはらぬさまならば、かばかりもおぼえずやあらん。今はいとあはれに心苦しきかたそひて、御心にかからぬをりなかりけり。

「通釈」

右近はその日の夕暮れ時に（薫大将の）殿へ参上すると、（あたりは）いつもよりも人少なくしんみりとしていて、わずかに、御簾を巻き上げて（薫大将は）笛を吹き鳴らしておいでになる時であった。（右近が）女房達とこっそり話し合っている気配を（薫大将が）聞きつけなされて、特に右近をわが前に召し出して、「どうであったか」などとお尋ねなさるので、（右近は）自分が見た様子を詳細に申し上げて、あの「なに尋

ね来て」とおっしゃった(浮舟の) 独り言も申し上げたので、(薫大将は) なるほどその(歌の) 通りに思っていることであろうと(思うと)、心にしみじみと感じられて思わず涙ぐみなさる。変わらない様子であれば、かえってこれほどにも思わないであろう。今はひどくしみじみと感じ心苦しいことも加わって、(薫大将の) 御心にかからない時はないのである。

〔語釈〕

○殿——薫の「殿(御殿)」。

○笛吹きすさびつつ——「すさぶ」は、気のむくままに慰みのわざをなすことをいい、ここでは、気のむくままに笛を吹くことをいう。

○御達——宮仕えをしている婦人たち。

○あさからず——浅くはなく。くわしく。詳細に。

○口ずさみ——一人言のように詩歌などを詠ずることをいい、ここは浮舟が「あらぬ世と思ひなしつる山の奥になに尋ね来て袖ぬらすらん」と詠じた(「三十一 後夜」参照) ことをいう。

○なかなかかはらぬ——浮舟が出家せずに在俗のままでいるのであれば、かえって。

〔補記〕

①本段には次の箇所本文異同が見える。

- (1) 「聞きつけ給ひて」の箇所、第二類本は「いと、聞、つけたまひて」とし、『日本古典全書』七「古本山路の露」(池田亀鑑校註)は「いとどしく聞きつけ給ひて」とする。

- (2) 「かの『なに尋ね来て』とのたまひつる」の箇所、第二類本には、「彼なに、かうさのたつねきてとのたまひし」と見える。

- (3) 「いとあはれに」の傍線箇所、第二類本にはない。

②右近はさっそく薫大将の元へと向かった。自分が見てきた浮舟の姿を伝えねばならないからである。「浮世を離れたこんな所へどうしてやってきたのか」と詠みかけた浮舟について、右近から聞いた薫はひとしお浮舟の胸のうちが思われてならない。思いがけず涙ぐんでしまう薫に、偽らぬ彼の心が見えてくる。当時の読者には、こうした折に涙を見せる薫にとりわけ心を打たれたことと思われる。

三十三 本 性

宮もうちうちにをりごとに、さばかりなる人もありがたかめるをと、おぼし出づることはたえねども、その筋ばかりのことはかけてもなし。本性^{ほんじょう}あらはれ給ひし宮の君にも、ほどなく語らひ寄り給ひて、例のしばしばはなやかにおぼしたりしかども、今はさしもあらぬにや、対の御方をば、なほつきせずあはれなることにおぼしたれば、世人も心にくく思ふべし。大将君の御心しらひも、なほたえまなく、昔にかはり給はぬを、ありがたくおぼし知られけり。若宮のおよすけ給ふままに、いみじくうつくしうおはしますを、あまたならんだに、なほなべてには思ひきこえぬべうもおはしまさぬを、ほどふれど、ほかにはかかるたぐひなきを、いみじうおぼしたれば、行末たのもしげなり。帝后^{きさい}の宮などゆかしがら

せ給へど、なほ宮の御ものはぢ若若しうて、参らせたまつり給はぬなるべし。

〔通釈〕

匂宮も内々にその機会のあるたびごとに、これほどの人もそうざらに
いるものではないのにと、思い出しなさることは（一向に）絶えないけ
れども、その筋（愛情関係）のようなことは全くないのである。（匂宮
の）本性があらわれてしまわれた宮の君に対しても、間もなく語り合い
近寄りなされて、例のごとく（いつものように）度々はなやかにと思い
なされたけれども、今はもうそれほどでもないのであらうか、対の御方
（中君）を、やはり尽きることなく胸にしみ入る人とお思いなさるので、
世間の人々も奥ゆかしく思っているようである。薫大将の君の御心づか
いも、やはり絶えることもなく、昔と少しも変わりなさらないのを、
（中君は）そうざらにはなさそうにお思い知りなされた。若宮がだんだ
んと成長なさるにつれて、この上もなくかわいくていらっしゃるのを、
兄弟の多い場合でさえ、やはりなみなみには思い申し上げてしまいそう
にもおいでなさらないのを、時が過ぎていくけれども、他にはこのよう
な類のないのを、この上もなく大切にお思いなさるので、これから先が
（なかなか）たのもしそうである。帝や後の宮（明石中宮）などは早く
見たいものだと思ひなさるけれども、やはり匂宮の御ものはじめ若々
しくて、（若宮を）参上させ申し上げられないらしい。

〔語釈〕

○宮——匂宮。

○うちうちに——内々に。こっそり。ひそかに。

○その筋ばかりのこと——浮舟との愛情にかかわるようなこと。

○本性——持って生まれた性質。

○宮の君——式部卿宮の姫君。補記②の項参照。

○対の御方——中君。

○御心しらひ——御心づかい。ここは、薫の中君に対するお心配りをいう。

○若宮——匂宮の子。母中君。補記③の項参照。

○あまたならん——沢山あるような（場合）。ここは兄弟が大勢である場合をいう。

○かかるたぐひなき——若宮が誕生なさる気配がないこと。

○行末たのもしげなり——（若宮の）将来に期待をもつことができそうである。補記④の項参照。

○帝後の宮——「帝」は今上帝。「後の宮」は「明石中宮」。

〔補記〕

①本段には次の箇所本文異同が見える。

(1) 「宮もうちうちにをりごとに」の箇所、第二類本は、「宮、ものゝ
おりごとには」とする。

(2) 「昔にかはり給はぬを」の箇所、第二類本は「かはらぬ御もてな
しを」とする。

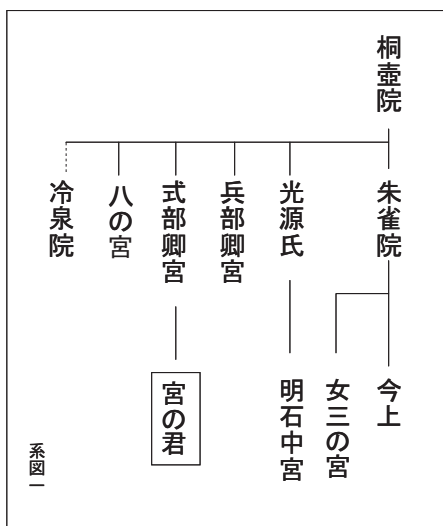
(3) 「思ひきこえぬべうもおはしまさぬを」の箇所、第二類本には
「思へうはあらすなるを」と見える。

(4) 「いみじうおぼしたれば、行末たのもしげなり」の箇所、第二類

本は「けなり」、『日本古典全書』七「古本山路の露」(池田亀鑑校註)では「たのもしげなり」とする。

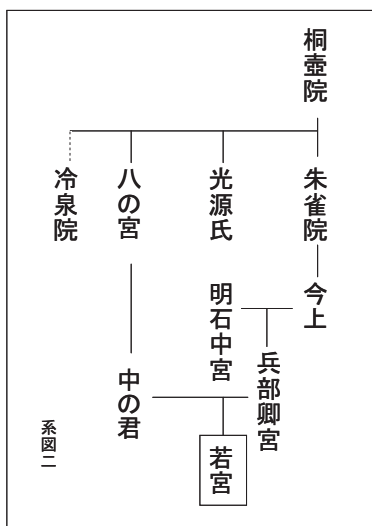
②「宮の君にも、ほどなく語らひ……」について。

蜻蛉の巻に「兵部卿の宮、この君ばかりや、恋しき人に思ひよそへつべきさましたらむ、父親王は兄弟ぞかし、など、例の御心は、人を恋ひたまふにつけても、人ゆかしき御癖やまで、いつしかと御心かけたまひてけり。」と見えて、「この春」に「人ゆかしき御癖」は止むことがなかったと語られていた。「宮の君」の系図(系図一)を示しておく。



③「若宮のおよすけ給ふ」について。

薫が権大納言兼右大将に昇進したのは、二月初め(二十七歳)のことであった。物語には「きさらぎの朔日ごろに、直物とかいふことに、権大納言になりたまひて、右大将かけたまひつ」と見えた。同じ頃に中の君男子出産。物語に「からうしてその曉に、男にて生まれたまへるを、宮もいとかひありてうれしくおぼしたり」と語っていた。その「男(若宮)」も、今は「およすけ給ふ」のであり、「いみじくうつくしうおはします」のであった。「若宮」の系図(系図二)を示す。



④「行末たのもしげなり」について。

本位田重美氏は「匂宮が即位されたような場合、夕霧の六君に御子がないとなれば、この若宮が春宮に立たれる公算が大きいわけである。」『源氏物語山路の露』八五頁・頭注一三」と注された。若宮誕生の折に匂宮が「男にて生まれたまへるを、……いとかひありてうれしくおぼした」のも、納得することができよう。

宿木の巻に「右の大殿おほいどのにはいそぎたちて、八月ばかりに、と聞こえたまひけり」と、匂宮と六の君との婚儀が八月に予定されたと語っていた。いよいよその八月となり、「右の大殿おほいどのには、六条の院ひじがしの東の御殿おんどみ磨きしつらひて、限りなくよろづをととのへて待ちきこえたまふに、十六日いさよひの月やうやうさしあがるまで心もとなければ、いとしも御心に入らぬことにて、いかならむと、やすからず思ほ」す「右の大殿（夕霧）」は、

大空の月だにやどるわが宿に待つ宵よ過ぎて見えぬ君かな
と詠み贈ったのであった。六の君との結婚をそれほど気乗りのしない匂宮ゆえに、六の君の父夕霧の心は落ち着かないのであった。初夜に匂宮が抱いた六の君の印象は、「人のほど、ささやかにあえかになどはあらで、よきほどになりあひたるこちしたまへるを、いかならむ、ものものしくあざやぎて、心ばへもたをやかなるかたはなく、ものほこりかななどやあらむ、さらばこそうたてあるべけれ」と、匂宮にいささか危懼の念を抱かせる女性であった。だから六の君に御子がないというのでも納得できるといえよう。

⑤宿木の巻（薫二十六歳春）で誕生した若宮（匂宮・中の君の子）は、

今二歳半に成長。といえは光源氏が母桐壺更衣と死別したのが三歳であった。また、明石の上が大堰でわが子（後の明石中宮）を手放したのも、三歳の幼児期であった。玉鬘が母夕顔と死別したのも三歳であった。こうして見ると、作者は親子の別れを三歳に設定して物語を展開して来たといえようか。ところが『山路の露』では「若宮のおよすけ給ふまに、いみじくうつくしうおはします」と語られていて、『源氏物語』と異なっている。なかなか明るい印象を受ける。そのような若君を祖父母「帝后の宮などゆかしがらせ給ふ」のは、世の常の姿であるといえよう。

ところで、作者は「秋つかたになれば、この君は、ゐざりなど」と、薫が這いはじめたことを柏木巻末で語っていた。また、「若君は、乳母めのとのもとに寝たまへりける、起きて這はひ出でたまひて、御袖を引きまつはれたてまつりたまふさま、いとうつくし」と光源氏の袖を引いてまといつく様を、「白き羅うすものに、唐からの小紋こもんに紅梅こうばいの御衣すその裾、いと長くしどけなげに引きやられて御身はいとあらはにて、うしろの限りに着なしたまへるさまは、例のことなれど、いとらうたげに白くそびやかに柳やなぎを削りて作りたらむやうなり」と、腹部丸見えで、背中に片寄った着物の様子をも語っていて、幼児の薫の姿が読者の目に浮かぶことを付記しておく。

三十四 御 祈

まことや、大将君は左になり給ひて、内大臣かけ給へれば、いとど光そひたる心地するに、過ぎにし頃より、宮例ならず悩ましうし給ひしを、御乳母たちなどみたまつり知る事ありて、男君にかくときこえければ、さうざうしかりつるに、少しはうれしとおぼしけり。母君などはたさらにもいはず、おぼし喜びて、御祈どもなにかと、今よりこちたし。

〔通釈〕

そうだった、大将の君（薫）は左大将におなりなさって、内大臣も兼任されたので、これまで以上に光が加わった心地がするのであるところに、この間から女二の宮が例になく悩ましくなされたのを、御乳母たちが見申し上げるうちに知る事（懷妊）があつて、男君（薫）にその由を申し上げたので、これまで満たされぬ思いをなさっていたのが、少しはうれしいことだと思ひになった。母君（女三の宮）などはいうまでもなく、お喜びになり、御祈禱などなにかと、今から大変なことである。

〔語釈〕

○宮例ならず——「宮」は、薫の北の方「女二の宮」をいう。「例ならず」は「常にはなく・いつもと違って」の意。なお、「女二の宮」に關しては本注釈一「三 黒髪」の「語釈」女宮・同「補記」②女宮（女二の宮）に關わる系図参照。

○悩ましう——気分がすぐれない様子。ここは、「つわり」をいう。

○男君——薫。

○母君——薫の母「女三の宮」。

○こちたし——「言甚し」の約。□うるさいことをいう。ここでは程度のはなはだしいことをいう。

〔補記〕

① 本段には次の箇所本文異同が見える。

- (1) 「みたまつり知る事ありて」の傍線部、第二類本にはない。
- (2) 「母君などはたさらにもいはず」の箇所、第二類本は「人みな」とする。

② 「例ならず悩ましうし給」う女二の宮。これは女二の宮懷妊によるものであった。薫大将二十八歳。女二の宮十八歳ばかりである。これまで何かと満たされぬ思いの見えた薫も、この度は「少しはうれし」と思うことができた。母君（女三の宮）の喜びはいうまでもないことであつて、以後なにかと「こちたし」ことである。いささか明るくなりそうな薫大将の明日が待ち受けているといえる。